

## 日本の伝統芸能から学ぶこと



丸山 孝志  
MARUYAMA Takashi  
本誌編集委員

「よっ、成田屋」。熱心なファンに支えられている日本伝統芸能の歌舞伎。これが演じられている舞台の一つ、銀座に位置する「歌舞伎座」は、3期の建替を経て現在の昭和24年に建設された4期目の建物も含め121年間の歴史の伝統と歴史を育んできたが、2010年4月でその歴史ある建物も改築のためしばらくの間休館するとのこと。

この歌舞伎は、400年あまりの歴史を持ち、1603年頃に出雲阿国という人物が奇抜な格好をした反抗的な男を指す「歌舞伎者」に扮して舞ったのがはじめとされ、これ以降、江戸幕府から官能的であるという理由でいずれも最終的に禁止された「遊女歌舞伎」や美少年による舞いの「若衆歌舞伎」を経て、芝居を演じるという歌舞伎の原点と言われる「野郎歌舞伎」が現代に至っているとのことですがこの江戸時代から現在も多くの方から愛されているという歌舞伎においても、三味線に合わせて人形が愛や恥じらいを演じる同じく日本伝統芸能である「文楽」が江戸時代の全盛期においては一旦衰退したものの、文楽や能の人気演目も題材に継続して演じられてきたことにより、庶民の人気も回復し現在に至ってきているとのこと。



▲ 歌舞伎座

私が昨年、鑑賞した歌舞伎は、歌舞伎座が平成22年4月に休館するまでの間月替りの演目としてこれまでの人気の高い出し物を中心として公演する「歌舞伎座さよなら公演」で、市川海老蔵や中村獅童、そして女形の名演で名高い坂東玉三郎など、現在の歌舞伎を支える人気と実力を兼ね備えた役者が演じるもので、江戸時代などその当時の話題性を取り入れた演目や、明治時代から大正時代に小説や戯曲の作品で活躍した泉鏡花などの比較的新しい題材を取り入れたものなど、人々に愛されて数多く演じられてきた作品であり歌舞伎の持つ魅力が一杯に詰まった内容でした。

また、伝統芸能のうち能楽は「能・狂言」から構成され、このうち「能」は日本最古の歌舞劇といわれ寺院や神社で捧げられる舞である「猿楽」や、豊作を願う舞を演じる内容の「田楽」などを源流とするとのこと、猿楽の謡と舞が発達し、室町時代から600年にわたって武家など時の権力者達からも保護され好まれて演じられてきたものです。また、この「能」から分化し、人間の行動・会話の滑稽さを題材としたのが「狂言」です。

私が昨年その芸に触れることができたのは、能楽を野外の自然に接する環境下で夜間に演じられる「薪能」で、薪能は毎年大阪や鎌倉などで演じられているものも有名ですが、私が鑑賞したのは新宿御苑で毎年演じられている「新宿御苑・薪能」で、昨年ですでに第25回目を数え、伝統芸能である能の最高の舞台を観客に楽しんでもらおうという主催者の熱心な呼びかけで毎年開催され現在に至っているとのこと。

このときの状況を少し詳述すると、第25回新宿御苑・薪能が開催された当日は、夜のとばりが降り新宿御苑はあたり一面闇の世界で、僅かな照明しかない北東角の大木戸門から会場の新宿御苑に入り、さらに奥に進んだ受付で初めて多くの観客が集まってきているということが確認できました。さらに奥には5mくらいの間隔

に吊るされた60Wほどの足元を照らす程度の白熱電球の風情を感じさせる誘導路をさらに200mばかり進むと、今度は御苑内のイギリス風景式庭園敷地に設置された3,000席の観客席が目前に開け、既に開演遅しと待ちわびる観客の姿が目飛び込んできました。その観衆の見詰める先には、屋外に設置された能舞台があり、その正面には本舞台が位置し、その左奥には役者の控えである鏡の間から本舞台までを繋ぐ橋掛りの廊下と、その橋掛りの観客席側手前に遠近感を表すために右側から配置された大中小の3本の松。そして、通常室内の舞台正面に配置され神が宿る老松が描かれる「鏡板」の代わりに、新宿御苑の自然の樹木が背景として配置され、屋外の環境下で自然と一体となりつつも近隣の高層ビルという現代の景観とも渾然一体となった薪能ならではの舞台演出が観客を待ち構えていました。

薪能の当日の演目は、「葵上」（あおいのうえ）という源氏物語を題材とした演目で、光源氏の正妻である葵上に六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）という女性の心情・魂が複雑に絡んだシリアスな内容でしたが、「シテ」を演じる観世鍔之丞の好演に加え、地謡や大鼓・小鼓・太鼓・笛の囃子方との調和のとれた歌舞により、幽玄といわれる能の独特の世界観がうまく表現されて感動しました。また、この能に引き続き演じられた「狂言」においては、少々大げさとも感じられる語りや役者の体全身で感情を表す表現のうちに物語が進行する、「業平餅」という演目で、紫式部より50年も前に活躍したという在原業平という人物が主人公であり、旅先で遭遇した餅屋での人と人との会話のやりとりを人間国宝の野村万作、万作の息子の野村萬斎が狂言のもつ滑稽さ、楽しさをうまく表現し、これまであまり古典芸能というものに関心がなかった方にも古典芸能への興味を持たせるような演技がみられました。

これらの日本の伝統芸能観て感じたのは、演じられてきた演目のストーリー性がすばらしさだけでなく、何かこれら歌舞伎、能・狂言の古典芸能がこれまでの永い間人々に愛され脈々として受け継がれてきたことには深い理由があると改めて感じました。その理由とは、一口では言い切れませんが、古典芸能が単に時の権力者達の庇護や、支えてきた観客の存在のみならず、これを演じる役者である「人」が真剣にその芸に取り組み、完全に決められてはいないとされる「型」というものにとらわれすぎることなく、常に伝統は大事にしつつも、更に自分の編み出した技を巧みに織り交ぜて、常にひたむきに精進を重ねてきた努力の賜物が芸として表現されていたためではないか感じます。古典芸能によくある、「世襲」ということの重みだけではなく、その役者自身が自らの



▲ 森の薪能バンフ

地位に甘んじることなく、日々厳しい鍛錬で芸を探究し続け、この研鑽の成果が芸となって表現されることにより一層表現に味わいが出て観衆を魅了し、これが永い間老若男女を問わず古典芸能への興味を掻き立て人々を惹き付けてきたためではないかと思えます。

これら日本の伝統芸能のように、常にその時代の新しいものも取り入れつつ、それに関わる役者である「人」それ自身が伝統を後世に脈々と伝えようとする真摯な姿勢そのものは、決してこれらの日本の伝統芸能に携わる方だけのものではなく、現代の私たちのように非開削技術に関わっている技術者にも通じるものがあると感じます。

常にお客様のニーズをとらえ、最新技術を取り入れた開発品の完成・成熟を目指し、失敗と成功を繰り返しながら完成度を上げ実績を積み重ねてきている個々の技術においても、これに携わる多くの技術者達の飽くなき探究心よりその技術が具現化されて完成し、さらに向上心により日々持続的に進化しより良いものとなってこそはじめて発展し続けることができるのだと感じます。

現在の自分達が関わっている非開削技術に関して、今後ともより多くの人たちのために信頼されかつ少しでも社会に貢献できるようにするため、技術の改良改善を重ねてより高い完成度を追求していくなど、改めて技術者として自覚を新たに日々努力を惜しまず精進していきたいと感じるとともに、今後の具体的な行動目標にして取り組んでいく必要性を感じます。

また、私自身も幅広い非開削技術を実際に支えているJSTTの本誌の編集委員会のみなさんや編集企画小委員のみなさんとともに、機関誌の発行を通して少しでも非開削技術の発展にも貢献していけたらと思います。皆様本年もどうぞよろしくお願いたします。